

## 消えた1円の謎

JJ1SXA/池

作家の内田百閒は鉄道好きが高じて、「なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行って来ようと思う」の書き出しで知られる紀行文「阿房列車」を著した。

戦後間もない日本で、用事もないのに鉄道に乗ることは限られた人だけに許された道楽だったに違いなく、その非常識さを自覚して名付けた「阿房列車」は、ぼやきを交えつつ旅の顛末を語る直截な言葉には、鉄道愛があふれている。

「特別阿房列車」で、作者の内田百閒に、お供の山系君が語った「消えた1円の謎」という以下のような話がある。

3人連れの旅行客が宿に泊まった。宿泊料は計30円。1人10円ずつ出し合った。

帳場から「これはサービス」と5円を返すよう言われた従業員は、そのうち2円を懐に入れ、3円を客に渡した。

客の負担は1人9円ずつで27円、従業員がごまかした2円を足しても29円にしかならない。

1円はどこにも消えていないが、上の文章は尤もらしい、1人9円(10円-1円)×3=27円、くすねた2円を足すと29円、これが正解のような書き方だが間違いだ。

最初に支払った30円がどのように分けられたかと考えるのが正解、

宿には、30円-5円=25円

旅行者に、3円

くすねた金は、2円

25円+3円+2円=30円

**おまけ**(紙面に余白ができたので)

$0.999\cdots = 1$  は本当か？

本来なら、

$0.999\cdots \doteq 1$  となる筈だが…

1/3を0.333…とすると

$1/3+1/3+1/3=0.333\cdots+0.333\cdots+0.333\cdots=0.999\cdots$

分数のまま計算すると

$1/3+1/3+1/3=1$

つまり、 $0.999\cdots \doteq 1$ は、 $0.999\cdots = 1$ となるわけです。

(2023年12月記)